

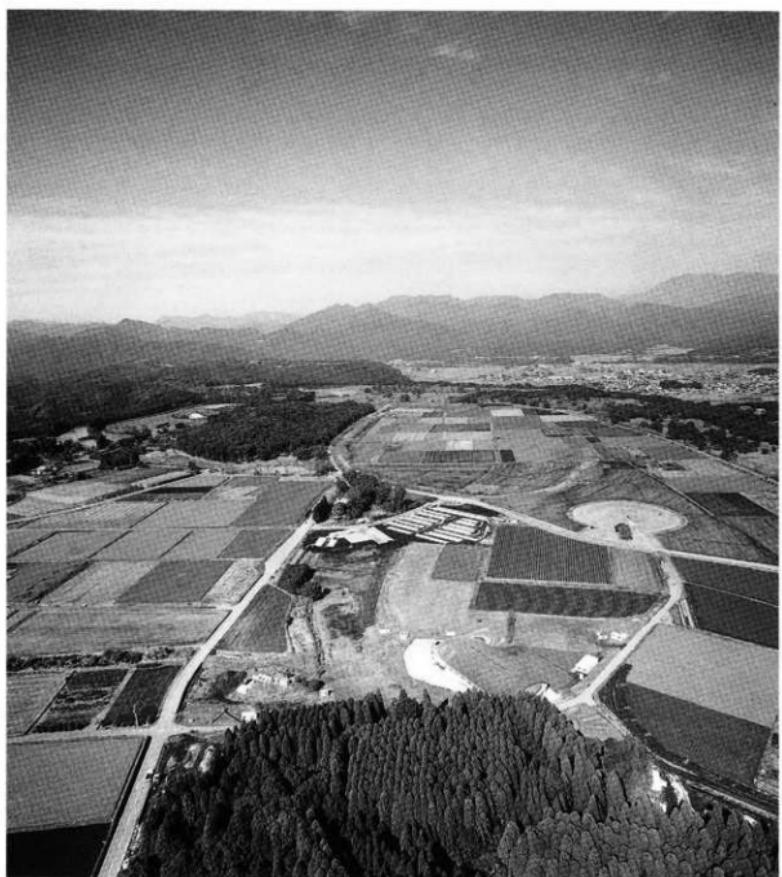
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集

市内遺跡発掘調査概要報告書VI

西都原地区遺跡
日向国分寺跡

2001

宮崎県西都市教育委員会



西都原地区遺跡全景（西都原台地南側より）



日向国分寺跡C区第2トレンチ遺構検出状況（東より）

序

西都市教育委員会では、市内遺跡発掘調査として平成7年度より日向国分寺跡の確認調査、平成10年度より西都原地区遺跡の確認調査を実施しております。本書は、それら発掘調査の概要報告書であります。

今回の調査で西都原地区遺跡については、弥生時代及び古墳時代後期の堅穴式住居跡をはじめ、土壙墓や掘立柱建物などを検出することができました。

また、日向国分寺跡では、昨年度までの調査で主要伽藍に取り付く東門、南東側に塔跡、南側に南門が想定され、今年度はこれらの遺構調査を行いました。遺構に関しては確定できませんでしたが、所在箇所を限定できるなど大きな成果を得ることができました。

調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なものです。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた調査指導の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成13年 3月30日

西都市教育委員会

教育長 菊池彬文

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を請け、平成12年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 平成12年度の確認調査は、西都市大字三宅字西都原に所在する西都原地区遺跡内(たばこ耕作に伴う天地返し地点)、西都市大字三宅字国分に所在する日向国分寺跡(4地区)を対象に行った。
調査は平成12年6月3日から平成13年2月22日まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査及び図面作成等については義方政幾・笠瀬明宏が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、第Ⅰは義方政幾・笠瀬明宏、第Ⅱ・Ⅳ章は笠瀬明宏、第Ⅲ章は義方政幾が担当した。
6. 本書に使用した方位はFig. 1・2・8・12は平面直角座標系第Ⅱ座標系であり、Fig. 3・4・7・10・11は磁北である。この地点の磁北は真北より $5^{\circ} 25'$ 西偏している。
7. 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
8. 遺物・土層に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準土色帳』に準拠した。

目 次

| | |
|------------------------|----|
| 第Ⅰ章 序説 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の体制 | 1 |
| 第Ⅱ章 遺跡位置と歴史的環境 | 2 |
| 第Ⅲ章 西都原地区遺跡の調査 | 4 |
| 第1節 調査区の設定と概要 | 4 |
| 第2節 調査の記録 | 6 |
| 第3節 小結 | 11 |
| 第Ⅳ章 日向国分寺跡の調査 | 12 |
| 第1節 これまでの調査結果と概要 | 12 |
| 第2節 遺構・遺物 | 14 |
| 第3節 小結 | 17 |

報告書抄録

挿図目次

- Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図
- Fig. 2 西都原地区遺跡調査地位置図($s=1/10,000$)
- Fig. 3 第51地点住居跡実測図($s=1/40$)
- Fig. 4 第39地点住居跡実測図($s=1/40$)
- Fig. 5 第39地点出土遺物実測図($s=1/2$)
- Fig. 6 第51地点出土遺物実測図($s=1/2$)
- Fig. 7 第52地点土壙墓($s=1/20$)及び出土遺物($s=1/2$)実測図
- Fig. 8 日向国分寺跡現況平面及びトレンチ配置図($s=1/1,000$)
- Fig. 9 A区第1トレンチ出土遺物実測図($s=1/4$)
- Fig. 10 C区第2トレンチ遺構実測図
- Fig. 11 D区第2トレンチ遺構実測図($s=1/40$)
- Fig. 12 日向国分寺跡推定伽藍復元図($s=1/1,000$)

図版目次

巻頭 PL. 1 西都原地区遺跡全景（西都原台地南側より）

PL. 2 日向国分寺跡C区第2トレンチ遺構検出状況（東より）

PL. 1 一西都原地区遺跡一

1. 西都原地区遺跡遠景
2. トレンチ調査状況（第49地点）
3. アカホヤ火山灰下層調査状況

PL. 2 一西都原地区遺跡一

4. 西都原地区遺跡近景
5. トレンチ調査状況（第50地点）
6. 第39地点堅穴住居跡検出状況

PL. 3 一西都原地区遺跡一

7. 第51地点堅穴住居跡遺物出土状況
8. 第51地点堅穴住居跡中央埋甕検出状況
9. 第51地点堅穴住居跡検出状況

PL. 4 一西都原地区遺跡一

10. 第52地点土壙墓検出状況
11. 第52地点土壙墓内土器検出状況
12. 第53地点掘立柱建物跡検出状況
13. 第53地点掘立柱建物柱穴及び
柱痕検出状況

PL. 5 一西都原地区遺跡一

14. 西都原地区遺跡出土遺物

PL. 6 一日向国分寺跡第6次一

15. A区第1トレンチ遺構検出状況（北より）
16. B区第3トレンチ防空壕検出状況（北より）
17. C区第2トレンチ遺構検出状況（東より）
18. C区第2トレンチ金堂掘込地業跡
検出状況（南西より）

PL. 7 一日向国分寺跡第6次一

19. D区第1トレンチ粘土層平垣面検出状況（南東より）
20. D区第1トレンチ北側土層断面（南より）
21. D区第2トレンチ鉄滓出土状況（南より）
22. D区第2トレンチ遺構検出状況（北東より）

PL. 8 一日向国分寺跡第6次一

23. 日向国分寺跡第6次出土遺物

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

西都原地区遺跡の発掘調査については、たばこ耕作の天地返しに伴い実施したものであり、昨年度からの継続である。このことについては、天地返しの地下遺構に与える影響は大きく、遺跡の消滅が懸念されることから、たばこ耕作組合と協議を重ねてきたが、生産者の生活権等を考慮すると現状保存が困難であると判断し、重要な遺構・遺物が検出された場合には現状保存を前提とした協議することを条件に本年度も調査を実施することとなった。

調査は、新たに天地返しが行われる予定になっている20地点(第37～56地点)の確認調査であり、調査期間としては、たばこの準備及び他耕作物との関係で平成12年8月～平成13年2月までの間で調整しながら進めることになった。

一方、日向国分寺跡の調査は、西都市教育委員会が調査を行う以前に3度調査が行われてきた。

まず、昭和23(1948)年に駒井和愛教授を団長とした、主として早稲田大学で組織された日向考古調査団により行われた。⁽¹⁾その後、昭和36(1961)年及び平成元年度には県教育委員会により発掘調査が実施されたが、⁽²⁾僧坊跡と推定される遺構以外には主要伽藍配置について明確にされていない。

当地域は、当時の報告書の周辺写真と現在では寺城内外の宅地化が著しく、畑地や空き地の確保も困難となり、伽藍配置の確認が急務である。このことから、西都市教育委員会が平成7年度より主要伽藍配置等の確認調査を実施してきた。^{(4)～(6)}本年度も、この継続として調査を行った。

※(註)は第Ⅱ章参照

第2節 調査の体制

| | | |
|------|-------|--------------------|
| 調査主体 | 教 育 長 | 菊 池 彰 文 |
| | 文化課長 | 阿 万 定 治 |
| | 同 補 佐 | 奥 野 拓 美 |
| | 同 主 事 | 鹿 嶋 修 […] |
| | 同 主事補 | 七 持 留 理 |

| | | |
|-----|-------|---------|
| 調査員 | 文化課係長 | 義 方 政 幾 |
| | 同 主 事 | 簽瀬 明 宏 |

調査指導　日高正晴(西都原古墳研究所長)

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方、標高50～80mには通称西都原と呼ばれる台地がある。台地上には前期古墳を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡・西都原古墳群が所在する。また、南九州独自の墓制である地下式横穴墓も現在までに12基、羨道が深く掘り込まれたタイプの横穴墓も13基程確認されている。

この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く伸びた洪積台地で、その南端には產土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になり、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。

西都原地区遺跡は西都原台地状に所在し、寺原・丸山・原口・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼称である。原口遺跡は台地南側、寺原遺跡は原口遺跡の北側、丸山遺跡は台地北側、西都原遺跡は台地中央部の東側にそれぞれ位置している。これら遺跡内からは、丸山遺跡で繩文時代早期の集石遺構(焼砾群)、原口第2遺跡からは古墳時代後期の堅穴式住居跡2軒、寺原第1・4遺跡からは弥生時代終末の堅穴式住居跡3軒などが確認されている。また、同台地北東端の新立遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の堅穴式住居跡20軒などが検出されている。

一方、日向国分寺跡は、西都原台地と西都市街地の中間台地に位置し、北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷に囲まれている。また、北方600m程の妻高等学校敷地内には同尼寺跡も保存されており、本地域は古代にも重要な地域として多くの遺跡が遺存している。

また、国分両寺は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であるが、近年、日向国分寺跡から北東に直線で約1.2kmの寺崎・法元地区に、宮崎県教育委員会の調査により日向国衙跡が確定された。

このように、西都原台地上はもちろん、日向国分寺跡を含む中間台地は古代日向国の拠点として栄えた歴史的環境をもつ地域であったと思われる。

(註)

- (1) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949
- (2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺址」『日向遺跡綜合調査報告』第3号 1963
- (3) " " 『四街・郡街・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告』III 1991
- (4) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996
- (5) " " 「市内遺跡発掘調査概要報告書II」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997
- (6) " " 「市内遺跡発掘調査概要報告書III」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998
- (7) " " 「市内遺跡発掘調査概要報告書IV」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第28集 1999
- (8) " " 「市内遺跡発掘調査概要報告書V」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第29集 2000
- (9) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (10) " " 「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- (11) 平成12年3月に宮崎県教育委員会より国衙跡と判断された。現在、国指定申請に向かっている。



1. 西都原古墳群
2. 御陵墓（男狹穂塚・女狹穂塚）
3. 丸山遺跡
4. 西都原遺跡
5. 寺原遺跡（西都原地区遺跡）
6. 新立遺跡
7. 原口第2遺跡
8. 日向國分寺跡
9. 日向國分尼寺跡
10. 酒元遺跡
11. 寺原遺跡（日向國衙跡）

Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図

第Ⅲ章 西都原地区遺跡の調査

第1節 調査区の設定と概要

西都原地区遺跡については、これまでに、圃場整備をはじめ道路拡幅等に伴う発掘調査が行われているが、なかでも、平成5年度から平成7年度まで実施された圃場整備に伴う発掘調査は、調査面積が90,000m²にも及ぶ大規模的なもので、道路及び削平によって地下構造の保存が困難な部分について行われた。

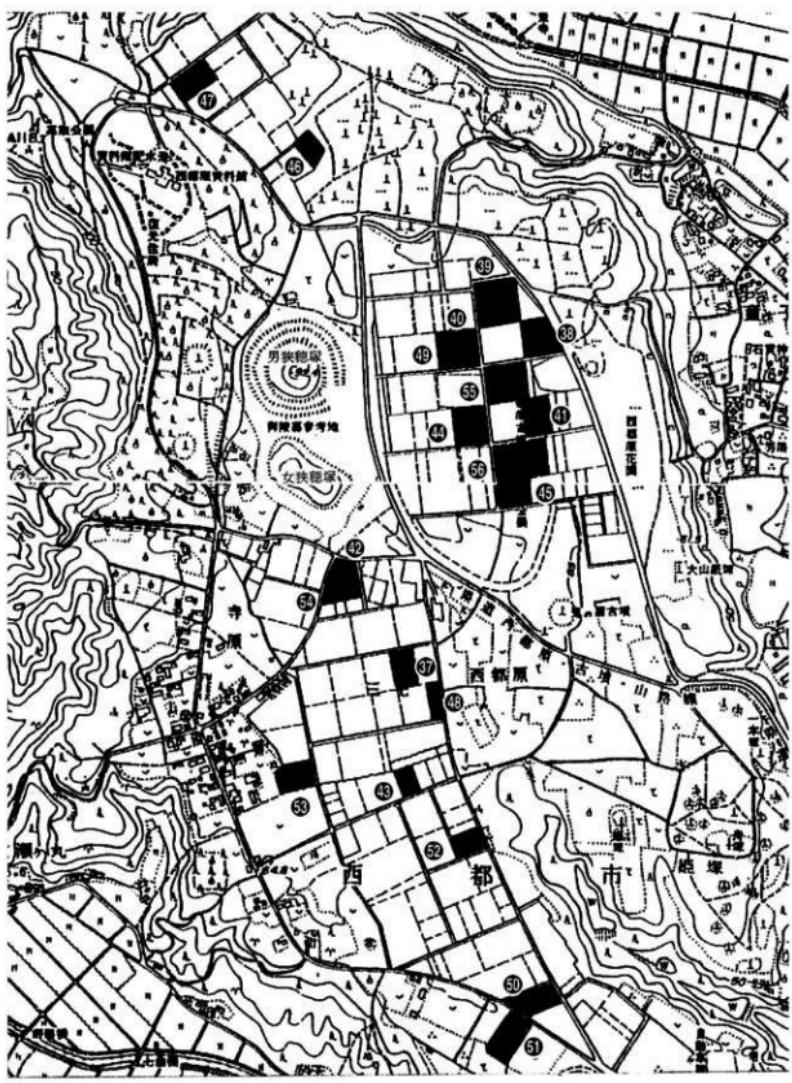
この調査では、縄文時代早期の集石遺構及び焼穵群をはじめ、弥生時代中期の竪穴式住居跡や古墳時代前期の竪穴式住居跡群、さらには、横穴墓と地下式横穴墓との折衷形として注目された古墳時代後期の横穴墓などが検出された。位置的には、そのほとんどが西都原台地縁辺部であり、台地中央部からは弥生時代の竪穴式住居跡などが検出されているものの、密度的にはかなり低いことが判明している。また、古墳の築造に関連した人々の遺構が確認されなかったことから、台地上特に陵墓の東側を中心とした地域は古墳を築造する特別な空間、いわゆる聖域として認識していたものと想定される。なお、横穴墓については、現在、県文化課が主体となって進めている「地方拠点史跡等総合整備事業」(歴史ロマン再生事業)のなかで保存・活用されることとなり、「西都原古墳群遺構保存覆屋」が建設され、現在公開されている。

このような中、本年度については、これまでと同様に天地返しが予定されている陵墓の西側及南側、そして、県立西都原資料館の東側の圃場整備された畑地を中心に確認(トレンチ)調査を行った。

調査は、アカホヤ火山灰層を中心に行ったが、アカホヤ火山灰層の遺存率は昨年とは違って良好であった。調査地点は、20地点(第37地点～56地点)で、調査対象区域の面積も約74,000m²と広範囲で苦慮したが、幅2mのトレンチを6～10m間隔に設定して遺構・遺物の遺存状況等の確認を行った。そして、遺構・遺物が確認された場合には、さらに詳細にトレンチを設定して範囲・分布状況の確認を行った。

また、アカホヤ火山灰下層の文化層については、トレンチ内に幅2m・長さ2m程の小トレンチを設定して確認を行った。

調査の結果、第39から弥生時代後期初頭、第51地点から6世紀末～7世紀初頭の竪穴式住居跡をはじめ、第53地点から時代は不明であるが掘立柱建物跡1棟、第52地点から7世紀末頃の土壙墓1基を検出するなど、少しずつではあるが西都原の謎を解く資料が得られ大きな成果を上げることができた。



番号～調査地点

Fig. 2 西都原地区遺跡調査地位置図 (S=1/10,000)

第2節 調査の記録

1. 遺構と遺物

《竪穴式住居跡》

竪穴式住居跡は、広範囲の調査にもかかわらず2軒しか検出されなかつた。

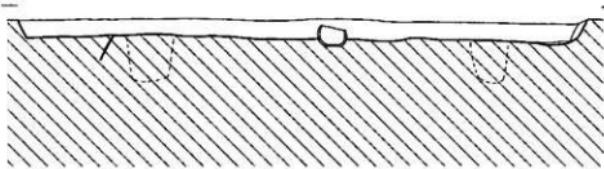
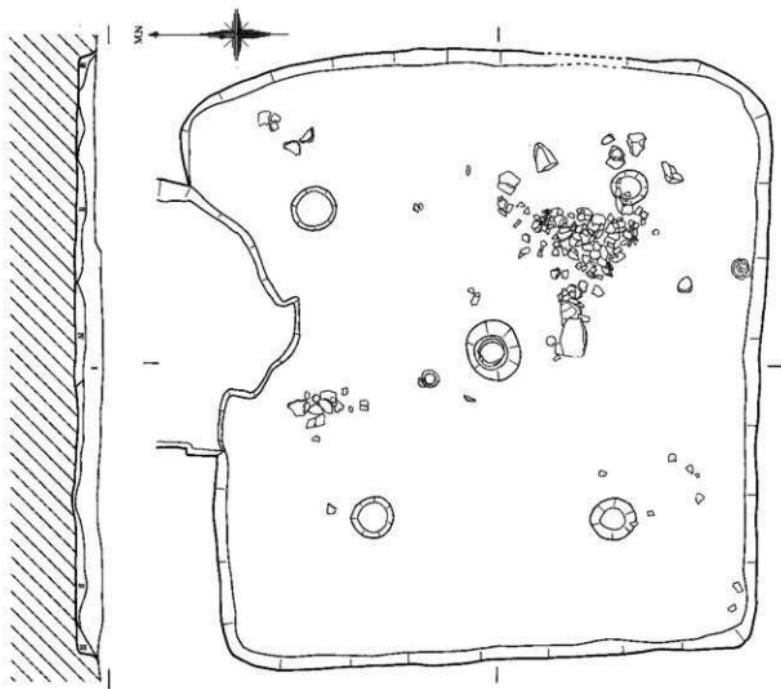
第39地点の竪穴式住居跡(Fig. 3)は、西都原台地北西部で、西都原第107号墳の北西100mに位置している。長軸5.75m・短軸5.12mの規模を有する方形プランのもので、検出面からの深さ0.38mを計る。床面中央部にも2.38×2.20mの方形の堀込み(段差)が見られる。床面は平坦で、主柱は2本である。遺物は、あまり出土していないが、口縁部が逆「L」字状に外反し、胴部に突帯を有する大型の壺形土器(Fig. 5 ①～③)や口縁部が「く」字状に外反し磨き調整が施された壺形土器(Fig. 5 ④)など、が出土している。時期は出土土器の特徴から弥生時代後期初頭頃と推定される。その他、石器類は出土していないが、よく石器に加工される緑泥岩の破片が数点出土している。

第51地点の竪穴式住居跡は、西都原台地の南側で、姫塚古墳(西都原第202号墳)からは小さな谷を挟んだ南南西500mに位置している。長軸5.00m・短軸4.60mの規模を有する方形プランのもので、検出面からの深さ0.22mを計る。床面は平坦で、主柱は4本である。また、床面中央部に埋甕を有するタイプのもので、西都原では初めての検出例である。遺物は、南東部を中心に出土しているが、そのほとんどが壺形土器である。底部が平底のもの(Fig. 6 ②)が多いが、中には、丸底で弾丸状の器形を有するもの(P.L. 5 ④)も含まれている。また、須恵器壺(Fig. 6 ③)や口縁部に突帯を持ち、その口縁部と突帯上面、さらには胴部にまで小さな竹で連続刺突を施した壺型土器(Fig. 6 ①)などが出土している。時期的には、これら出土土器の特徴から6世紀末～7世紀初頭と推定される。

《土壙墓》

第52地点から1基(Fig. 7)検出した。古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出した第51地点から北に350mの地点に位置している。長軸5.75m・短軸5.12mの規模を有し、南側が少し狭まった長楕円形プランのものであるが、上部のはほとんどが削平されており、検出面からの深さ0.05～0.08mを計る。

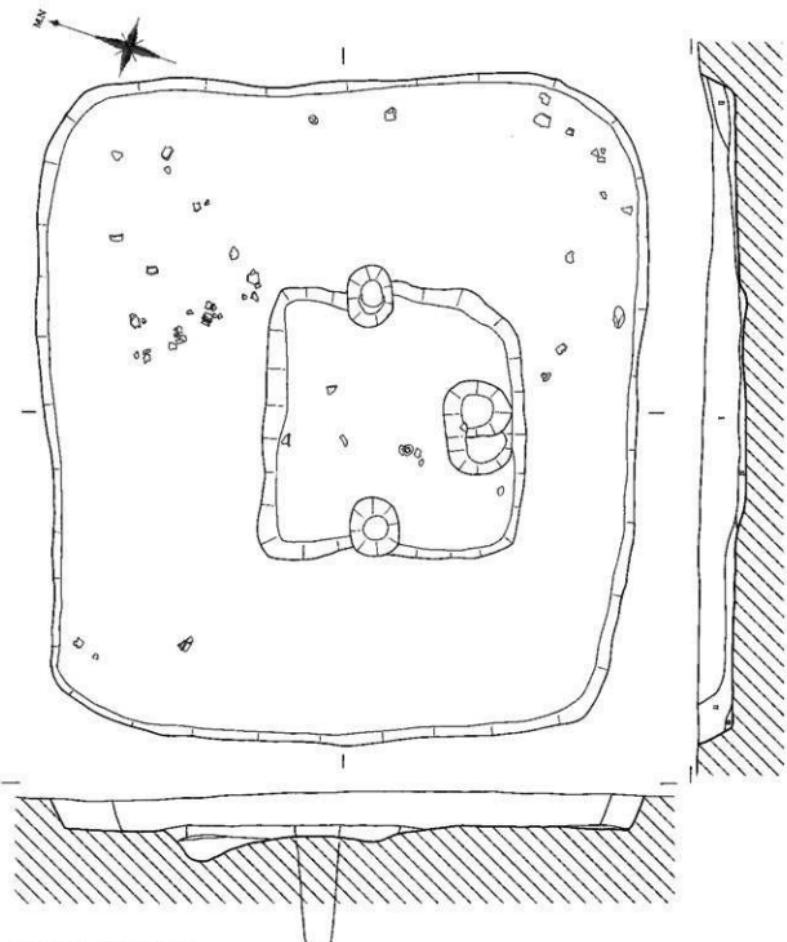
遺物は、底面西側の中央部から土師器碗1点と須恵器碗1点の計2点が出土している。いずれも完形品で、上を向けて副装されていた。土師器碗(Fig. 7 ①)は丸底で、内湾しながら口縁部に至っている。須恵器碗(Fig. 7 ②)は、体部からやや外反しながら口縁部に至り、高台を有している。時期的には、7世紀末頃と推定される。



- I ~ 黒色土 7.5Y R2/1
- II ~ 黒褐色土 7.5Y R2/2
- アカホヤブロック多量混入
- III ~ 黑褐色土 10Y R2/2
- IV ~ 黑褐色土 5Y R2/1
- 焼土混入

2m

Fig. 3 第51地点 住居跡実測図 (S=1/40)



- I ~ 黒色土 7.5 YR 2/1
アカホヤブロック多量混入
- II ~ 黑褐色土 10 Y R 2/2
- III ~ 黑褐色土 10 Y R 2/2
- IV ~ 黑褐色土 5 Y R 2/1
焼土混入

0 2m

Fig. 4 第39地点 住居跡実測図 (S=1/40)

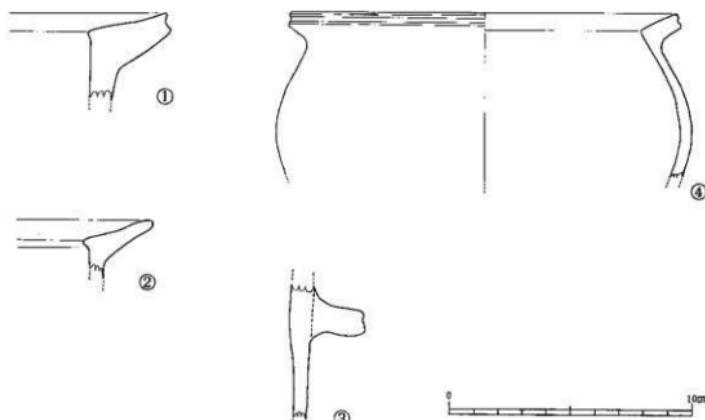


Fig. 5 第39地点 出土遺物実測図 ($S=1/2$)

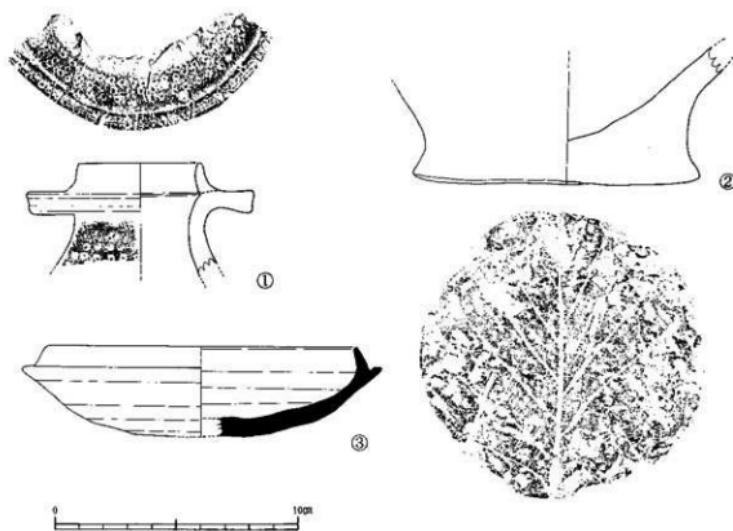


Fig. 6 第51地点 出土遺物実測図 ($S=1/2$)

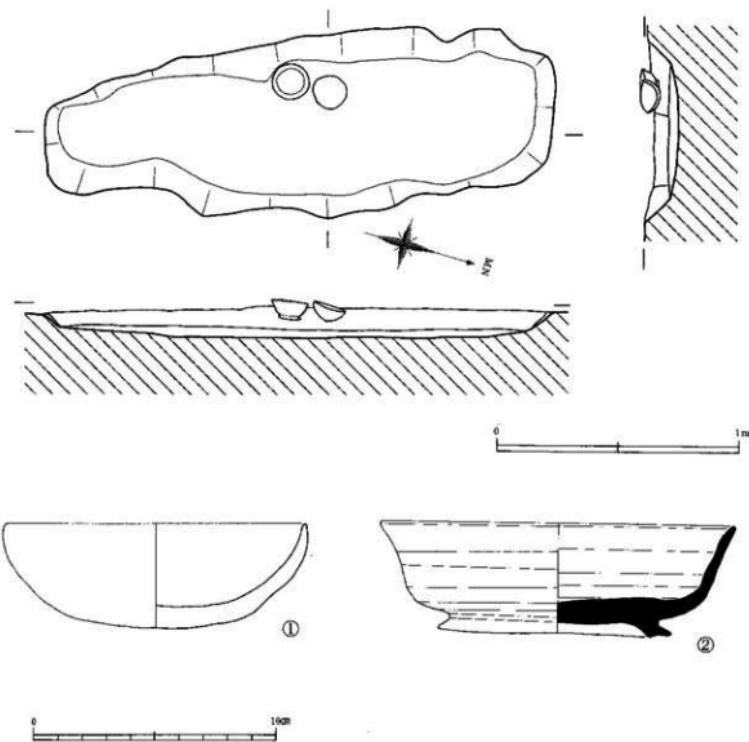


Fig.7 第52地点 土壌墓($S = 1/20$)及び出土遺物($S = 1/2$)実測図

《掘立柱建物跡》

第53地点から1棟(P L. 4-12)検出している。西都原台地の西側寺原住宅地帯に隣接している。1×3軒の南北棟で、桁行(NS)6.5m、梁行(EW)3.8~4.2mを計る。柱穴はすべて円形で、平均径は0.4m、埋土は黒色土で1個だけ灰白色粘質土の柱痕を確認できた。床面積は約23.7m²と推定される。遺物は出土しておらず、時代的なことは不明である。

第3節 小 結

西都原台地では、これまでに、童子丸(新立遺跡)⁽¹⁾墓地造成に伴う発掘調査をはじめ、圃場整備等に伴い行った大規模的な発掘調査(西都原地区遺跡)⁽²⁾や平成10年度から実施しているたばこ耕作の天地理しに伴い実施した発掘調査(西都原地区遺跡)によって、様々なことが判明してきた。

新立遺跡では、縄文時代早期の集石遺構や古墳時代初頭頃の堅穴式住居跡、西都原地区遺跡では縄文時代早期の集石遺構をはじめ、弥生時代中期から古墳時代初頭頃の堅穴式住居跡や横穴墓群、さらには、古墳時代以降中世までの掘立柱建物跡を検出した。このなかで横穴墓群は、西都原台地上に偏在する地下式横穴墓の特徴を併せ持っていることで、地下式横穴墓と横穴墓の折衷形という墓制を考えるうえでは非常に貴重な遺構として注目された。

ところで、今回の調査ではわずかではあるが、堅穴式住居2軒、土壙墓1基、掘立柱建物跡1棟を検出することができた。このなかで興味あるのは、第51地点から検出された堅穴式住居跡で、床面中央に埋甕を有するタイプのもので西都原地区では初めて確認されたことである。また、時期的にも6世紀末から7世紀初頭と推定され、西都原古墳群の最後の首長墓である鬼の窟古墳と同じ時期に相当するものであることからも注目される。なお、同タイプの堅穴式住居は松本原遺跡⁽³⁾・上ノ原遺跡⁽⁴⁾などから検出されているが、いずれも同時期のものである。

このことに関連して、現在、県教育委員会によって進められている西都原古墳群の保存整備に伴う古墳の調査によって西都原古墳群が4世紀前半には築造されはじめたことが確認された。そうなると、平成5年～7年に圃場整備に伴い検出した堅穴式住居跡群(第51地点の北北東600m)は同時代のものであり、少なくとも西都原台地南西側地域(寺原地域周辺)には古墳が築造されはじめた頃と終わり頃には集落跡が存在していたことになる。

第39地点の堅穴式住居跡は弥生時代後期初頭頃のもので、周辺からこれまでに弥生時代中期から後期にかけてのものが圃場整備や道路拡幅工事等によって数軒確認されており、同時代における集落の様相が徐々に解明されつつある。

このように、今回及びこれまでの調査によって、謎の多い西都原について少しずつではあるが解明されてきてはいるものの、まだ未解明な部分が多いのが現状であり、今後実施される調査等によって、さらに検討を加えていかなければならないと考える。

註

(1) 西都市教育委員会「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992

(2) 西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996

(3) 西都原古墳研究所「西都原古墳研究所年報」第9号～10号 1993～1994

(4) 西都原古墳研究所「西都原古墳研究所年報」第12号～13号 1996～1997

第IV章 日向国分寺跡の調査

第1節 これまでの調査結果と概要

日向国分寺跡については、前記のとおり、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団が、また、昭和36年及び平成元年度には県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査地点については明示できないが、昭和36年の調査は旧堂宇いわゆる五智堂及びその南側を中心に、平成元年度には寺域の北側にあたる部分(中央東西道路の北側)の確認調査が実施されている。

昭和23・36年の調査では、伽藍配置については明確にされていないが、平成元年度の県教育委員会による調査では僧房跡と想定される2時期の掘立柱建物跡が検出された。

西都市教育委員会による日向国分寺跡の調査は、平成7年度から実施している。

平成7年度の調査では、金堂の掘込事業跡と推定される遺構や推定回廊跡、さらに、その回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状遺構が検出されている。これらは、いずれも主要伽藍配置に関する遺構で、今まで明確にできなかった主要伽藍配置の一部を特定することができた。

平成8年度は、平成7年度検出した遺構の確定及び溝状遺構の範囲を確認する調査を実施した。調査の結果、直行した溝状遺構とそれに並行したピット列が検出された。ピットは溝に並行してほぼ等間隔に並んでおり回廊のものであること、また、II地点第1・3トレントの溝状遺構は回廊の外側に巡らされていたものと推定された。このことにより、溝状遺構の東辺が確定された。

平成9年度は、これらの調査結果を踏まえ、主要伽藍西側と北側溝の確認、主要伽藍内及び周辺の遺構等の有無確認を目的として調査を行った。調査の結果、A区から片側3本ずつ計5本の柱穴が検出され、主要伽藍西側の西門の存在が確認できた。また、西門北側より南北にのびる溝状遺構(SE002)が検出され、主要伽藍を取り巻くように溝状遺構が巡っていることが確認された。

平成10年度の調査は、西門から南北に延びる溝状遺構の範囲確認、主要伽藍配置南東側の回廊跡(推定)の確定を目的に行った。調査の結果、A区で以前確認されていた並行したピット列が回廊跡と確定され、最低でも3回の建て替えが判明した。また、主要伽藍南側の東西幅が84mと判明した。D・E区からは溝状遺構が確認できず、主要伽藍を巡る溝状遺構はこの箇所まで延びないと判明した。

平成11年度の調査は、回廊が取り付く中門跡、主要伽藍に取り付く西門に相対する東門跡、そして塔跡の確認を目的とし調査を行った。調査の結果、平成7年度にトレント調査を行ったA区を一辺10mに拡大し、中門跡の東側半分を検出した。中門も回廊同様最低3回の建て替えが行われていた。

本年度の調査は、昨年度調査を行った寺域南東側に想定している塔跡の確認、また、主要伽藍に取り付く東門の確認及び金堂の掘込地業跡の立証、また、南門の確認など多くのテーマをもち調査を行った(Fig.8参照)。調査の結果、東門は戦時中の防空壕で擾乱が著しく遺構は確認できなかった。また、塔跡については、調査面積も狭少であったが塔に伴う遺構等は確認できなかった。金堂の掘込地業想定箇所に關しても、現在、墓地の前に位置し擾乱が著しく掘込地業跡と断定出来るところまでは至らなかった。今回、初めて調査を行った南門に關しても確認できなかったが、南門に取り付く築地塀の基壇らしき粘土層が確認できた。調査区は民家の関係で中軸線よりやや西側に設定したことから、今後東側に南門が確認される可能性は高くなかった。また、この調査区の西側から、簡素な鉄工房跡が確認され寺域内で簡易な鉄生産か鉄製品の打ち直しが行われていた可能性も想起できた。

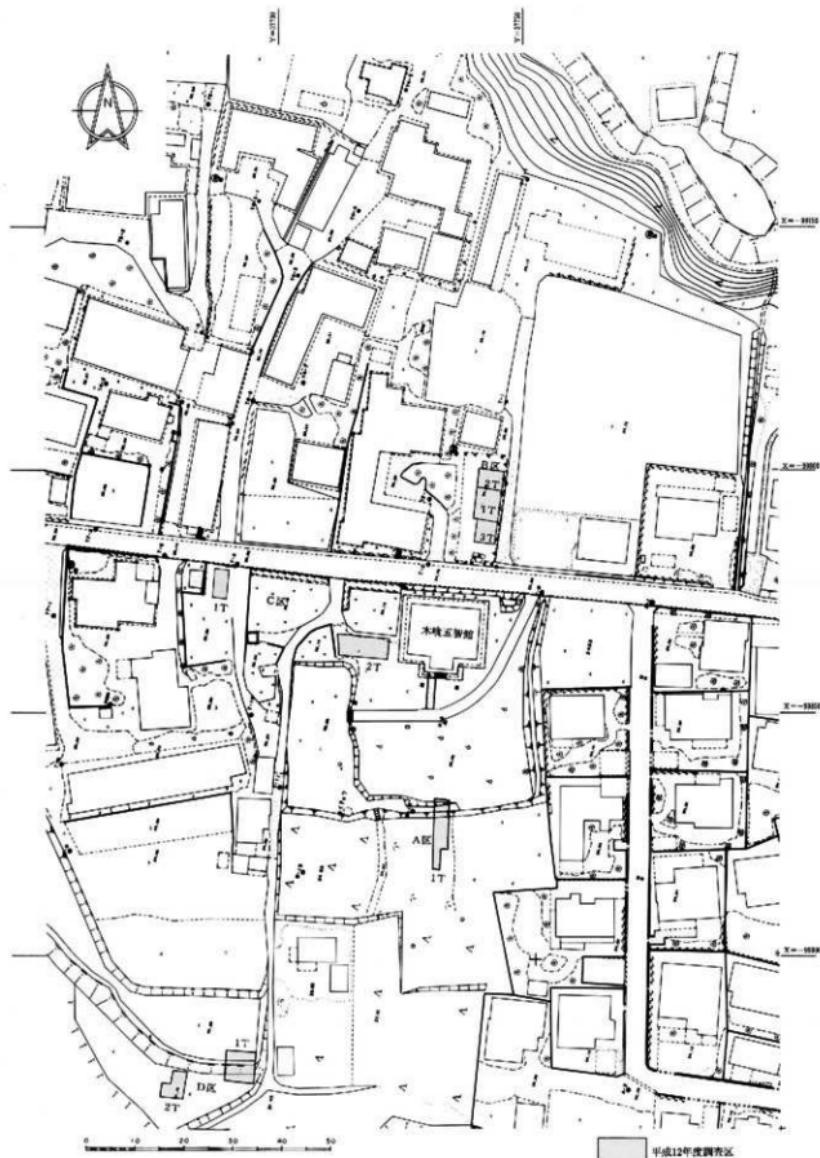


Fig. 8 日向国分寺跡現況平面及びトレンチ配置図 ($S=1/1,000$)

第2節 遺構・遺物

《A区の調査》

A区は、昨年度の調査で国分寺創建期の地割り溝及び塔の基壇らしき段落ちが確認され、この箇所の北側に東西1.5~3m、南北約14mの第1トレンチを設定し塔跡の検出を目的に調査を行った。調査範囲は私有地であり、現在、竹や杉が植えられていることから杉の間の狭い範囲で調査を行なった。

調査の結果、約80cm程掘削した箇所から地山が検出された。この辺りは、近世の擾乱が著しいこともあり、近世の溝が1条とピットが1基確認されたのみで、当時の遺構に関しては確認できなかった。

また、この箇所については、北側の回廊検出箇所の現地表面のレベルとの比高差が約50cmあり、塔の基壇は削平されている可能性も想定されてきた。今回の調査で、現在、回廊の外側に巡る土堤の調査も併せて行ったが、後世の土地改変により形成された可能性も高くなり、国分寺には直接関係ない土堤の可能性も想起できた。

遺物は軒丸瓦と軒平瓦が1点ずつ及び40点程の土器片・瓦片が出土した。1は単弁八葉の軒丸瓦である。内区中房に1+5の蓮子が遺存している。単弁は整形のものを4つ並べ、その間に残りの4弁を補うような配置をする。2は均整唐草文の軒平瓦である。外区に珠文を4個遺存し、頸部は曲線頸である。外区界線よりやや内側で平瓦部と接合される(Fig. 9参照)。

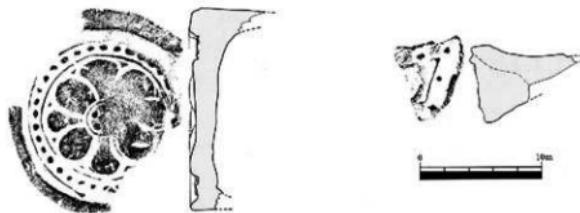


Fig. 9 A区第1トレンチ出土遺物実測図 (S=1/4)

《B区の調査》

B区は、平成9年度確認された主要伽藍に取り付く西門(一×二間、6本柱の掘立柱建物)を、回廊の南側東西隅雨落ち溝及び中門跡から中軸線を想定し折り返した箇所に、主要伽藍に取り付く東門を想定し調査を行った。調査は東西4.5~5m、南北15mの調査区(第1~3トレンチ)を設定し行なった。

調査の結果、調査箇所には戰時中の防空壕が2基所在し、遺構等は確認できなかった。また、この調査箇所に関しては、現地表のレベルで相対する西門が確認された箇所との比高差が約50cmあり、寺城の西側から東側にかけ当時の地形からはかなり削平されているようである。また、昨年度調査した調査区東側の雨落ち溝の深さは約10~20cm、西門側の雨落ち溝は深い箇所では1.4m程の深さがあり比較するとたいへん浅い。したがって、東門に関しては後世の削平により柱穴等の遺構は削平されている可能性が高くなかった。但し、昨年度確認された調査区東側の雨落ち溝がこの箇所では掘削されておらずブリッジ状に遺存していることから推察しても、この付近に主要伽藍に取り付く東門が所在していたことは間違いないであろう。

遺物は25点出土したが、後世の擾乱による瓦片や陶磁器片がかなり含まれている。

《C区の調査》

C区は平成7年度にトレンチ調査を行い、金堂の掘込地業跡と想定される遺構が確認されていたが、当時の調査面積は狭く確定するところまでは至らなかった。したがって、今年度は調査面積を東西約10m、南北約4.5mに拡大し調査を行った(第2トレンチ)。また、以前までの調査で確認された中軸線で西侧に折り返した箇所にも同様の遺構ないし回廊跡が確認される可能性もあったことから東西3m、南北6mの第1トレンチを設定した。

調査の結果、第2トレンチのすぐ北側には、江戸期から継続して使用されている墓が所在し、擾乱が著しかった。したがって、当時の柱穴と思われるピットもいくつか確認されたが、金堂の痕跡を留める遺構等は確定されなかった。また、金堂の掘込地業跡に関しては、平成7年度の調査でアカホヤ火山灰面まで掘削した段階で掘込地業跡内に黒色の粘質土が堆積していた。今年度、調査区西側を約50cm幅で掘削してみた結果、約20cm掘り下げた箇所から基本層序でアカホヤ火山灰下層に位置する明褐色粘質土が検出された。この層はかなりしまっており、一般的に縄文早期の文化層である。この層を掘込地業床面として利用することは問題ないがかなり浅く、掘込地業として用いたのであれば上面が削られたにしろ版築層が遺存しているはずである。また、回廊跡や中門跡の検出面もアカホヤ火山灰上層の黒色粘質土層である。この遺構を掘込地業跡だと想定すると、この黒色粘質土層上面では検出できずアカホヤ火山灰層で検出されることは、黒色粘質土層を主要伽藍内の造成で広範囲に盛土しなければならない。但し、金堂建立当時、アカホヤ火山灰上面にはかなりの土や火山灰が堆積していたと思われ、その表土を除去し掘込地業を設けるような必要性はないと思われる。したがって、推定掘込地業跡はアカホヤ火山灰降下後間もなく掘削された遺構の可能性が高い。この箇所に関しては今後、調査区を拡大し再度確認する必要がある(Fig. 10参照)。

遺物は、約200点の土器片・瓦片が出土した。但し、近世の陶磁器片や瓦片も出土しており、当時の状態を保っているものは少ないと思われるが、金堂の性格を想定するには重要な遺物である。

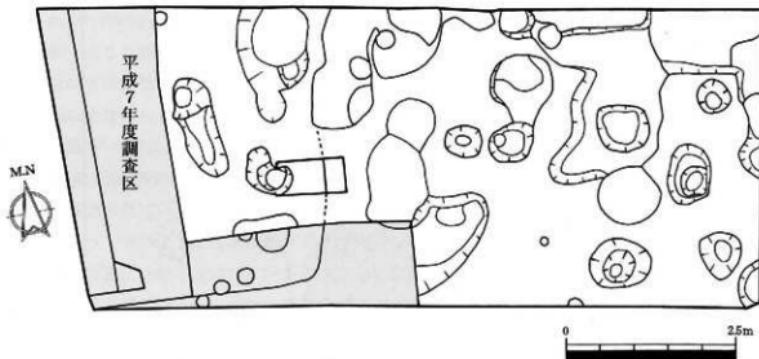


Fig. 10 C区第2トレンチ遺構実測図

《D区の調査》

D区は、上記したように昨年度までの調査で推定された中軸線に沿い、中門検出箇所から南側に約50m下った箇所に比高差1.5mの段落ちがあり、この箇所に南門を想定し調査を行った。この箇所は狭い山道(地境)が東側より延びており、この道が当時の寺域の南限の地割りを残している可能性から、以前よりこの周辺に南門が想定されていた。調査区は南門の想定箇所に東西6.5m、南北約6mの第1トレーニチを設定した。また、その西側に築地塀などの所在が想定されたことから東西3~5m、南北3~6mの第2トレーニチを設定した。

調査の結果、第1トレーニチからは南門の遺構と思われるものは確認されなかった。但し、第1トレーニチを約1.2m掘り下げた箇所から厚さ約50cm程の白色粘土層が検出された。昭和36年に調査を行った折りのトレーニチが調査区東側から検出され、当時の調査でこの粘土層下までの調査が行われていたが、南門に伴う遺構等は確認できていない。この層はかなり粘質を帯びた粘土層であり、人工的に敷いたものか地山か定かではないがかなり広い範囲で平坦面を形成している。今回の調査区は民家の関係上、中軸線よりやや西側に調査区を設定したことから、この粘土層は南門に取り付く西側築地塀の基礎などの可能性が出てきた。但し、調査区が私有地であり作物の植え付け時期の関係などから、それを追認することはできなかった。したがって、今後、今回の調査区東側に南門が確認される可能性が高くなつた。

また、調査区西側の第2トレーニチから、小規模の鉄工跡とみられる遺構が確認された。したがって、南門周辺で簡単な製鉄か鉄製品の打ち直しが行われていたことが明らかになった。

遺物に関しては、第2トレーニチから仏具の未製品と思われる鉄製品と鉄滓(総重量6kg)、焼土(12kg)及び輪の羽口1点が出土した(Fig. 11参照)。しかし、年代を想定できる遺物は出土せず、遺構の年代を想定することはできなかった。

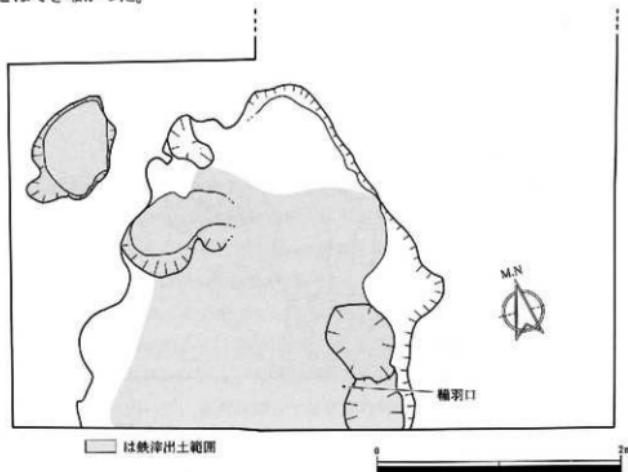


Fig. 11 D区第2トレーニチ遺構実測図 (S=1/40)

第3節 小 結

本年度の日向国分寺跡の調査は、平成12年6月3日から10月18日まで行った。西都市教育委員会が、国庫補助を請けて行う日向国分寺の調査は、平成7年度から行われており本年度で第6次になる。昨年度までの調査で、平成7・8年度は主要伽藍を取り巻くと思われる溝状遺構や金堂の推定堀込地業跡、平成9年度は主要伽藍に取り付く西門跡認、平成10年度は主要伽藍南東側の回廊跡が確認でき、最低でも3回の建て替えが判明した。また、昨年度の調査では中門が回廊同様、最低3回の建て替えが行われていることが判明した。1・2期目は回廊同様掘立柱建物であったが、3期目に建て替えられた中門は礎石建物であり、規模も拡大している。

本年度の調査は、昨年度調査を行った寺域南東側に想定している塔跡の確認、また、主要伽藍を取り付く東門の確認及び金堂の掘込地業跡の立証、また、南門の確認などを目的とし調査を行った。

調査の結果、主要伽藍に取り付く東門跡は戦時中の防空壕などの影響で擾乱が著しく、遺構は確認できず、塔跡に関しては基壇と思われる遺構等は確認できなかった。また、金堂の掘込地業想定箇所に関しても、現在、墓地が周囲に所在しており調査箇所を最大限に拡大して行ったが、擾乱が著しく礎石痕跡の確認や掘込地業跡と断定するまでは至らなかった。また、今回初めて調査を行った南門に関しても遺構は確認できなかったが、南門に取り付くと想定される築地塀の基壇らしき粘土層が確認できた。また、この調査区の西側から、簡素な鉄工房跡が確認され寺域内で簡易な鉄生産か鉄製品の打ち直しが行われていた可能性も高くなつた。

来年度以降は、塔跡・南門跡の再度確認調査を行い、寺域に位置するであろう各門や築地塀、その他建物について調査を行っていく予定である。

補. 日向国分寺跡推定伽藍配置の復元

今年度までの調査結果を踏まえ、今回、日向国分寺跡の主要伽藍部の復元作業を行ったので概要を簡略に以下記す(Fig. 12参照)。但し、今回の復元はあくまでも第1案であり、今後の調査結果で大幅に修正される可能性が高い。

回廊外側に巡る主要伽藍南側の雨落ち溝東西幅は84mである。したがって、この中に回廊は納まる。回廊は金堂の背後に想定している講堂までを開むものではなく、金堂の両袖に取り付くと思われる。通常、回廊は金堂の左右中心部に取り付くのが通例であるが、平成7年度に推定金堂東側(現在、木喰五智館所在箇所)を調査した結果、回廊跡と想定される柱穴痕は確認されていない。また、現段階で木喰五智館北側の東西道路が金堂に取り付く回廊の地割りの名残であろうと想定しており、平成7年度の調査により確認されている金堂の推定掘込地業跡を東西道路を中心に北側へ折り返すと金堂が南北に長い建物となり、そのような建物は想定できない。したがって、今回の復元案では、調査を行っていない木喰五智館背後に回廊を想定し、回廊の中心から北に金堂を折り返した。このため、回廊が金堂の北側端に取り付く形になった。また、金堂の掘込地業を南北の中軸線で西側に折り返した結果、金堂の規模は東西約15m、南北約20mと想定された。また、回廊及び中門は最低3時期の建て替えが行われ、第3期目の建て替えの段階で最大規模の主要伽藍を築き上げる。この時点での回廊の桁・梁行きは一間3mの規模である。また、第3期目の中門は、中軸線が確定されたことから西側に折り返すと東西9m、南北約5mの門になる。この時期には中門は礎石建物に変化し、回廊も外側に拡大することから日向国分寺最盛期であったことが予想される。

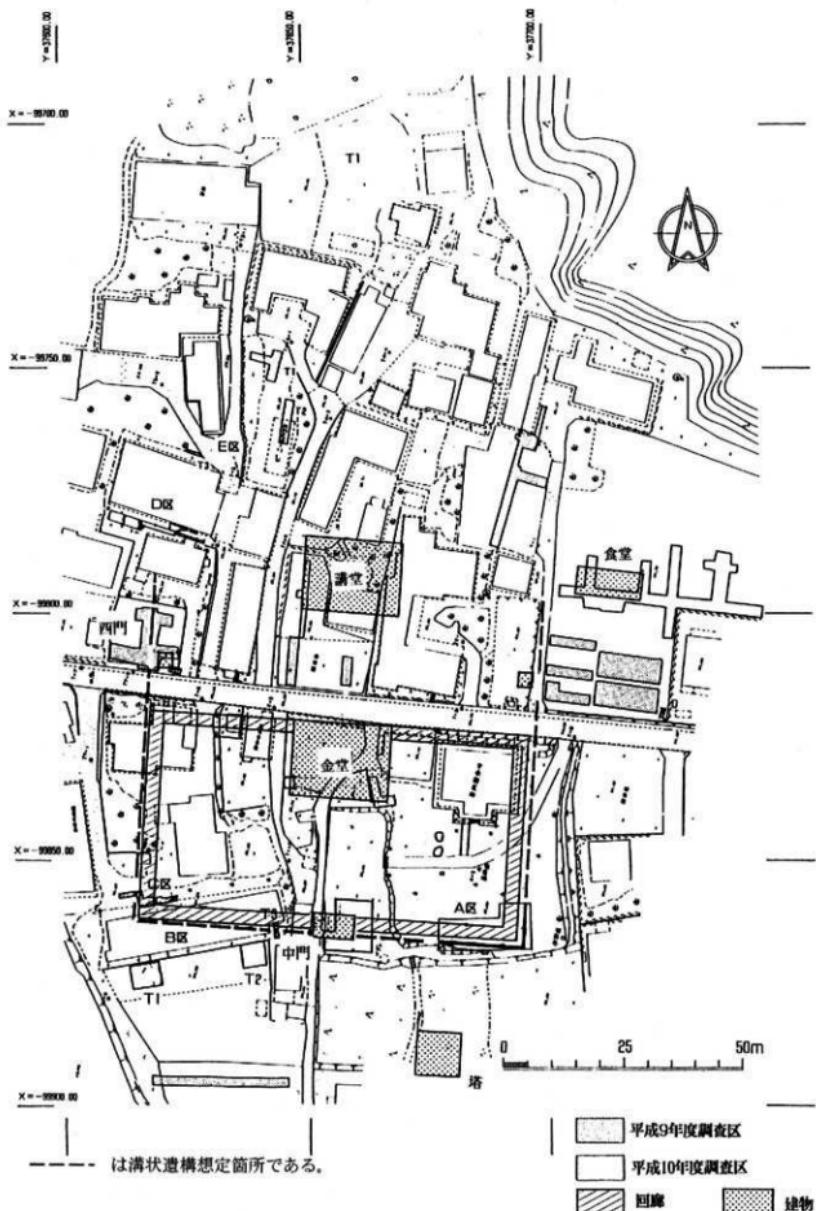


Fig. 12 日向国分寺跡推定伽藍復元図 ($S=1/1,000$)

図 版
(PLATES)

—西都原地区遺跡—

P L. 1



1. 西都原地区遺跡遠景



2. トレンチ調査状況（第49地点）



3. アカホヤ火山灰下層調査状況

— 西都原地区遺跡 —

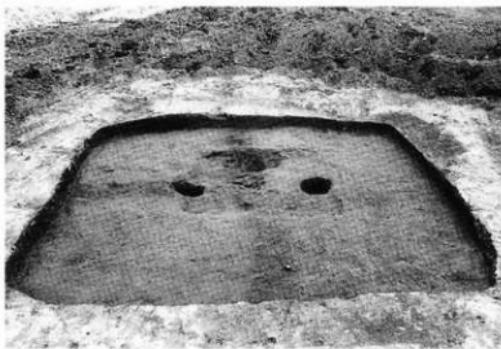
P L. 2



4. 西都原地区遺跡近景



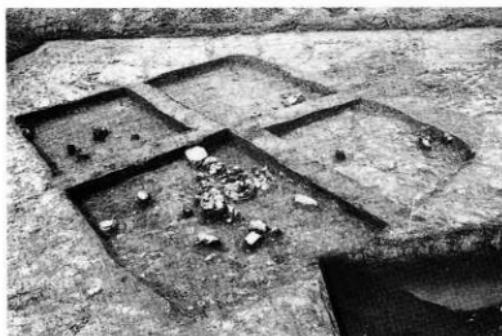
5. トレンチ調査状況（第50地点）



6. 第39地点竪穴住居跡検出状況

— 西都原地区遺跡 —

P L. 3



7. 第51地点
竪穴住居跡遺物出土状況



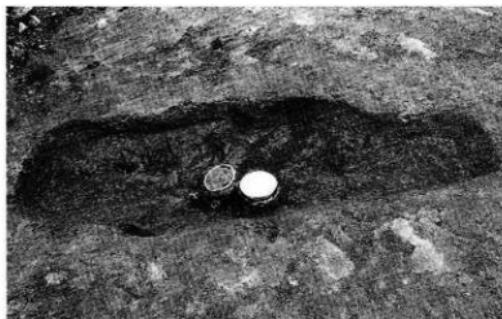
8. 第51地点 竪穴住居跡
中央埋甕検出状況



9. 第51地点 竪穴住居跡検出状況

—西都原地区遺跡—

P L. 4



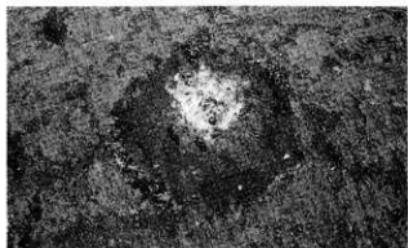
10. 第52地点
土壤墓検出状況



11. 第52地点
土壤墓内土器検出状況



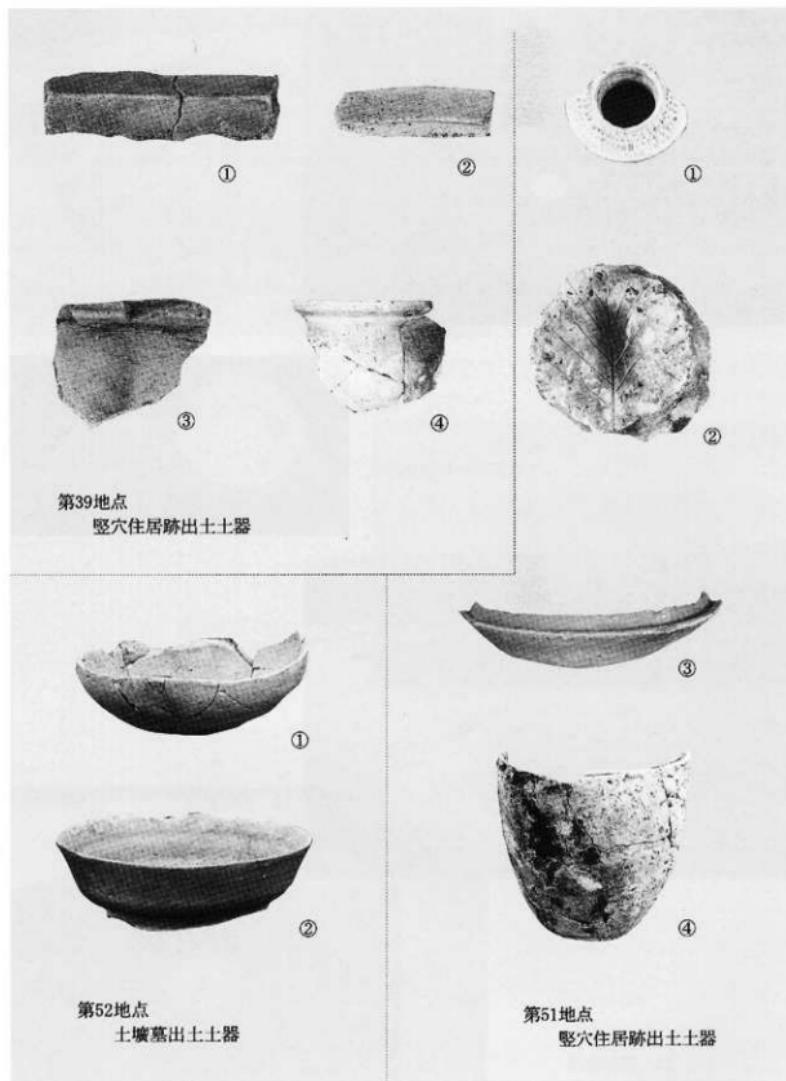
12. 第53地点
掘立柱建物跡検出状況



13. 第53地点
掘立柱建物跡柱穴及び柱痕
検出状況

— 西都原地区遺跡 —

P L. 5



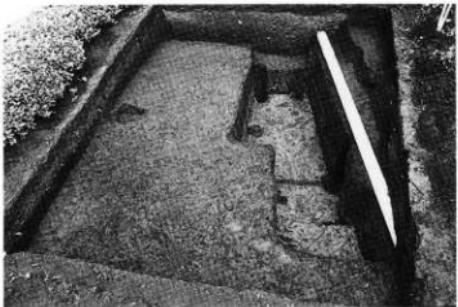
14. 西都原地区遺跡出土遺物

一日向国分寺跡第6次—

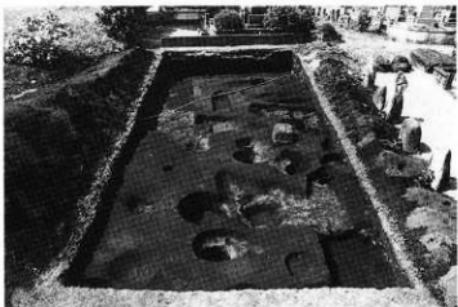
P.L. 6



15. A区第1トレンチ遺構検出状況(北より)



16. B区第3トレンチ防空濠検出状況(北より)



17. C区第2トレンチ遺構検出状況(東より)



18. C区第2トレンチ金堂掘込地業跡検出状況(南西より)

一日向国分寺跡第6次—

P.L. 7



19. D区第1トレンチ粘土層平坦面検出状況（南東より）



20. D区第1トレンチ北側土層断面
(南より)



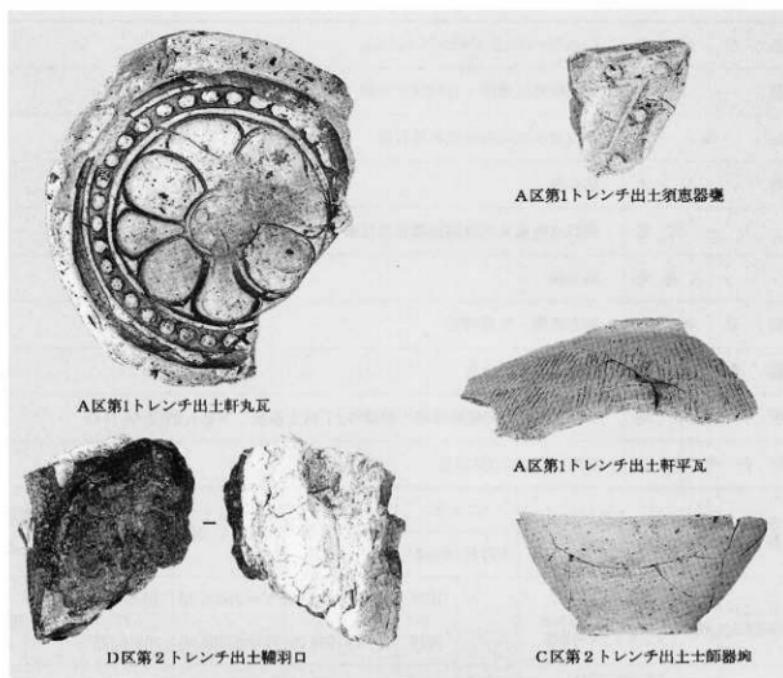
21. D区第2トレンチ
鉄滓出土状況(南より)



22. D区第2トレンチ
遺構検出状況(北東より)

—日向国分寺跡第6次—

P.L. 8



23. 日向国分寺跡第6次出土遺物

報告書抄録

| ふりがな | さいとばるちくいせき・ひゅうがくぶんじあと | | | | | | |
|------------------------|---|--------------|--|--|----------------------|------|---------------------------|
| 書名 | 西都原地区遺跡・日向国分寺跡 | | | | | | |
| 副書名 | 市内遺跡発掘調査概要報告書 | | | | | | |
| 巻次 | 第6集 | | | | | | |
| シリーズ名 | 西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第30集 | | | | | | |
| 編著者名 | 菱方政幾・鎌瀬明宏 | | | | | | |
| 編集機関 | 西都市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL.0983-43-1111 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2001年3月30日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所 在 地 | コード | | 北 緯 | 東 經 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | |
| さいとばるちくいせき 西都原地区遺跡 | みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおさみやわらはるわき 大字大字三宅寺原駅 他 | 1026 1029 | X=-99000.00 X=-97000.00 Y=36000.00 Y=36800.00 | Y=36000.00 Y=36800.00 | 20000718 20010222 | | 100,000 |
| ひゅうがくぶんじあと 日向国分寺跡 | みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおさみやあごくぶ 大字三宅寺国分 | 1008 | X=-99750.00 X=-99950.00 Y=37600.00 Y=37750.00 | Y=37600.00 Y=37750.00 | 20000603 20010118 | | 200 |
| 調査原因 | 種別 | 主な時代 | 主な遺跡 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| たばこ耕作 天地返しに 伴う調査 | 生活遺構 | 弥生～中世 | 竪穴式住居 掘立柱建物跡 土壙墓 | 弥生土器 土師器 須恵器 | | | |
| 遺跡所在確 認に伴う確 認調査 | 国分寺 | 奈良～平安 | 鉄工房跡 溝状遺構 1条 ピット(柱穴) | 軒平瓦片 丸・平瓦片 土師・須恵器片 陶磁器片 鉄滓 | | | |

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第30集

「市内遺跡発掘調査概要報告書」VI

西都原地区遺跡・日向国分寺跡

平成13年3月30日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 吉永印刷
